説教20210314 ヨシュア5：9-12　ルカによる福音書15：11－32

　　 「父の家とは」 3 21-523 502

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

「煮ても焼いても食えない」というたとえがありますが、これはたとえ話ではなく本当のことだなあと、この一年で私は悟らされました。コロナ渦にあって、外食が出来ませんでしたので、肉や魚や野菜を買ってきて、煮たり焼いたりしたら、全ての物は食えるようになりました。つまりより正確に表現すれば「似ても焼いても食えない者は、はじめから食えない」という事です。

　ここまでは、この世の食べ物のことを語りましたが、聖書にはこの世の食べ物とは違う食べ物が出てまいります。イエス様は「人はパンだけで生きる者ではない」といわれましたが、こういった御言葉こそ、この世の食べ物ならぬ、まことの食べ物でありましょう。

　私たちは御言葉なしでは、日々の生活を送っていくことは儘ならないでしょう。人間の語るもっともらしい言葉に乗せられていては、私たちはますます的外れの地点へと運ばれていくのがおちだからです。そういう意味で、御言葉というのは毎日摂取する必要がある食べ物と似たところがあるでしょう。ただし、人間の語る言葉の全てが、そのように罪を誘うわけではありません。私たちは、人間が語る言葉に背を向けるのではなく、むしろその言葉一つ一つを大切にして、よく吟味して、良いことと悪いことを見分けていくガンリキを養っていく必要があることでしょう。私事で恐縮ですが、私は神学校で修士論文を書いているときに、様々な歴史的な文献を読むことに没頭していました。それは神学の文献だけでなく、大衆小説にも及びましたが、今から思えば、その時は寝食も忘れて、歴史書の言葉の中に、み言葉を探し求めていたと言えるかもしれません。

　そしてもっと言えば、イエス様その方こそ、まことの食べ物なのです。私たちは聖餐式において、イエス様というまことの食べ物を頂いているのです。聖餐式も近づいてきましたので、私たちは心と体を清め、悔い改めつつ、その時に備えてまいりたいと願います。

　まことの食べ物は、歴史的にはマナと呼ばれていました。マナというのは今日の旧約の箇所でも語られました。　　ヨシュアをかしらにカナンという約束の地に入れられたイスラエルの人々には、もはやマナはなくなった、と記されています。彼らは、ヨルダン川を渡って、カナンに到着し、シナイ半島の荒れ野の４０年間のさ迷い歩く生活を終えることが出来ました。その荒れ野での４０年間の日々を支えたのが、マナという食べ物でした。それは主なる神が、私はパンを降らせると言って人間に与えた神秘的な食べ物で、食べてみるとウエハースのような味がしたので、人々はそれをマナと名付けて日々の食べ物としたのです。ウエハースのような、というようにその通り聖書には記されておりますが、この荒れ野の日々を養った食べ物が、このように味わい深かったという事に、主なる神の深いご配慮を感じます。

　今日の新約の聖書箇所に入りますと、これはイエス様のされたたとえ話の中でも一番目に有名といっていい、いわゆる「放蕩息子のたとえ」であります。しかし、このたとえ話は実は放蕩息子が主人公ではなく、父親こそが主人公であるという事もまた有名な話であります。どんな注解書にもそのように書いてあります。この父親こそ、父なる神なのですよ、というように解説しております。

　この父親は、放蕩息子が背徳的に家出をすることを、一切とがめだてすることもなく、財産分与も言われるがままに分け与え、彼の自由にさせてやりました。父親には、息子が遠い国で堕落し、絶望的になることがわかっていたでしょう。彼がいずれ我に返って回心することも予期していたかもしれません。いずれにしても父親は息子が帰ってくることを一日千秋の思いで待ちわびていたのです。　　息子が家出をしたことは、父親にとっては彼が死んだに等しい悲しみであったことでしょう。ですから、家に向かう息子の姿を遠くに見つけた時の、この父親の喜びは、息子が生き返り、新たな命が生まれた喜びそのものであったのです。

　この聖書箇所は有名箇所ですので、牧師は生涯の内何回もこの箇所で説教することになりますが、結論は、この父親の息子に対する無条件の愛、そして帰ってきたことを喜び祝福する、という事です。皆さんよくわかっておられると思います。しかし愛というのは分かっているだけでは、今一つ喜びが伴わないのではないでしょうか。　　愛の喜びというのは、賛美によってもたらされるのではないでしょか。

愛し我が人　野辺の花よ　　永久の命を宿したまえ　　その願いはその思いは

我らの父の　御子への愛

ちょっと一節（ひとふし）父なる神を賛美させていただきました。

　このイエス様が話されたたとえ話は、このように分かりやすい話であるとともに、読み進めていくうちに大変分かりにくい面があるという事に気づかされます。まず、この父の家は何をたとえているのかという事です。ここでの父の家とは、果たして新しいエルサレムのことなのでしょうか、ヨハネ黙示録に記されている、最終的に私たちが入れられるべき永遠の祝福の国なのでしょうか。この父の家には何やらしもべが沢山いるようですので、そのように読めなくもないですが、よく考えてみますと、息子たちは全然この父の家の住人らしからぬ姿なのです。弟は家出をしますし、兄のほうも父親からの恵みに感謝もしないで、ただ怒りをぶちまけているといった人物であります。彼らは、どう考えても新しいエルサレムの住人のようには考えられないでしょう。しかもこの兄弟の悪い行いの描写にはとてもリアリティがあります。弟は「イナゴ豆を食べてでも腹を満たしたかった」ですとか、兄には「『あの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上（しんしょう）を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』」などと言わせたりですとか、イエス様は、まるで実在の人物を想定しながら語っておられるかの様です。

　そしてこのたとえ話では終始、食べ物のことが語られます。しかもそれはまことの食べ物のことではなくて、イナゴマメですとか、肥えた小牛ですとか、小ヤギですとか、この世の食べ物のことなのです。

　つまりこのたとえ話では、まことの天の父なる神としての父親が比喩的に語られると同時に、息子たちや食べ物などでは、この世のリアリティがそのままに語られているという特徴があります。このたとえ話の中では、この世のことではない天の私たちの父と、この世でのリアルがコインのおもて裏のように共存しているのです。

　ここまで語れば、このたとえ話で、父の家が何をたとえているのか、わかって来られたでしょうか。　　　父の家とは、教会のことなのではないでしょうか。この地上にある教会は、清い人々の集まりではありません。むしろ罪びとの集まりであります。ですから私たちは教会でイエス様にお目にかかって、この罪深い身を常に清めてもらわなければならないのです。このように考えれば、この弟、この兄の振る舞いは、実にリアルに私たちに問いかけてくるのではないでしょうか。

さて先ほど短く賛美をしましたが、こういう御言葉があります。「感謝と賛美は私たちクリスチャンの務めです」「感謝と賛美は私たちクリスチャンの務めです」

つまり私たちは神に感謝し賛美しなければならないという事です。このたとえ話での兄弟は二人とも、父親に対する感謝と賛美が欠けておりました。その有様がリアルに描かれていますので、私たちは、よくわかるのではないでしょうか。ひょっとしたら身につまされることがあるかもしれません。この兄弟は性格も全然違って、仲も悪そうですが、父親に対して感謝も賛美もしないという点では一致しているのです。まるでこの世の兄弟関係のようでもありますが、もうちょっといいことで一致して、仲良くやれよと言いたくなります。この兄の弟に対する感情は、よくある人間的な嫉妬心から出ているのでしょう。そうして兄は怒って家に入ろうとしなかったとありますが、ここなどはまさに心理学の書物の事例に出てくるような振る舞いだと思わされます。かつてあるクリスチャンの心理学者の講演を聞いたことがあるのですが、彼は、この放蕩息子のたとえ話のことを話されて、最後にこのように言われました。それは、「果たしてこの弟は、こうやって父親の家に再び迎え入れられた後、みんなと円満に暮らしていけたのでしょうか」という問いでした。なるほどそういった見方もあるのかと、少しびっくりしたことを覚えていますがそんなことは余計な詮索で在りましょう。

　私たちは、この放蕩息子のたとえ話がリアルであるだけに、そのこの世のリアルさに引き込まれてしまう恐れがあるでしょう。ですからイエス様のたとえ話をお聞きするときはいつもそうですが、今ここで一つの聖霊に満たされて、神のみ言葉からそれることのないように心を整えてまいりたいと願います。

　この兄弟のこれからを思い起こすことは、私たちのこれからを思い起こすことにもつながってくるでしょう。先ず、弟のほうは、試練にあって、悔い改めて、父なる神に仕える者とされ、父なる神の家に入れられた人のことです。弟は、父親の家で奴隷となって働かせてもらおうと思ってやってきましたので、全然、父親の家に帰るなどと言う意識はなかったでありましょう。ですから、その家に息子として迎え入れられ、祝宴まで開いてもらったことに驚いたのではないでしょうか。そこでこの弟には、父親に対する感謝と賛美の念が生まれたことでしょう。音楽や踊りのざわめきはそのことの表れなのでありましょう。

　一方、兄にとってみればこの音楽や踊りのざわめきは耳障りなもの以外の何物でもありませんでした。それは、この兄が、今まで全く父親に感謝も賛美もしていなかったからです。そんな兄に対して父親は語ります。「お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」と。

父親のこの「死んでいたのに生き返った」という言葉を聞くと、永遠の命によみがえったという事を思わされますが、ですから私たちはこの父親の「死んでいたのに生き返った」という言葉に喜ばないではいられないでしょう。父親は兄にこう言って、弟のための祝宴に、この兄を呼び入れたに違いありません。

　永遠の命は私たちの遠くにあるのではありません。むしろ私たちの日々の祝宴のうちにリアルに立ち現れてくる、味わい深いマナのようなものであります。私たちはそのマナを味わいつつ、永遠の命の道を、神に感謝と賛美をしながら歩んで参りましょう。

祈ります

天にいます

私たちはこの世の現実の中で、あなたのみ言葉から遠ざかり、罪を犯してしまいます。どうか罪深い私たちをお許しください。私たちがいつもあなたに感謝と賛美を捧げることが出来るようにしてください。そして私たちみなが、まことの喜びを知り、音楽や踊りのざわめきの内に、あなたの祝福にあずかることが出来るようにしてください。

東日本大震災から１０年の年月が過ぎました。世を去った者と、今なおこの世にある者の父である私たちの主よ、どうか全ての者を等しくあなたの祝福の内に入れてくださいますように。ご遺族の方々が御心を知り、新たな希望に生かされていきますように。

永見光代さんが召天されて１っか月が過ぎました。どうか私たちが姉妹と共に、あなたの祝宴にあって、日々の歩みが満たされていきますように。

父と聖霊と共に